平成３０年５月２１日　つるつる会

⑮ オ　シ　メ　様　の　正　体

大井神社拝殿の南に鎮座する注連縄を巻かれた古代祭祀のにおい紛々たる写真の岩、氏子の皆様には先刻見慣れたものです。この岩が今回の主役です。

大井神社へ合祀された聖なる石

神社には、明治末に近郷の１９社が合祀された記録があります。この岩もその一つでしょう。これら１９社が大井神社でどのように祀られているのかは、明治４４年の火事もあり良く分からないのですが、どうやら、本殿内に祀られたものと、この岩のように、境内に置かれたものの二種があるようです。何故でしょう。簡単に言えば、明治に入り神道が国教とされたことに伴い、国教にふさわしい由緒をもつ神様は本殿内に、一方、八百万の神と言われ格別の由緒も考えられたこともなく、大木や岩にへばりついて明治を迎えた土着神は、境内に末社として祀られたのではないかと思われます。（シ見です。）

さて、本題の岩ですが姿形は古代祭祀の対象とされた磐座と考えてもあながち誤りとは言えないようですが果たしてどうか。

六道峠近くの磐座

そこで、今回は足守地区にある磐座を引合いに、この岩の正体を探り、皆様のご意見を伺おうとするものです。

先ず左の写真は、天照大神も素戔嗚尊命も存在しなかった頃、ただ大自然に対するオソレをもって祈りの心が生まれたと考えられる時代のいわゆる磐座です。

場所は、足守余町から総社鬼ノ城・新山へ通じる尾根道の途中、「六道峠」北東の山中、地名で言えば足守字鷺尾地内というところでしょうか。「六道峠」といえば、嘉応元年に足守庄が開発主の賀陽氏から後白河法皇に寄進されたとき、阿宗（阿曽）郷との境界を示す、戌亥・大横山牓示が置かれたと考えられているあたりです。

この一帯から、西北の総社市「鬼ノ城ゴルフ倶楽部」にかけては古墳群、古代製鉄遺跡が確認されており、この磐座がこれらの人達の祈りの場であったとしてもおかしくありません。

六道峠近くの磐座

しかし今は、大規模太陽光発電所建設用地とされていることは大変残念なことです。

この岩は計３個の巨石が東西に平たく並んでいるので高さは感じられませんがそれでも２ｍ以上はあり、ご覧のとおり中々の存在感があります。昭和２０年代の初め頃までは、高野山登

山講中等により、足守八十八箇所と共に祀られていたそうです。

上高田岩見の磐座

さて次は、上高田の岩見にある磐座です。これは真ん中に薄い岩を挟んだ三段重ねの体裁をとっています。一番上の岩には、土も無いのに木が根っこを降ろしています。岩の高さは４ m を超えるでしょうか。何やらマックのハンバーグもどきです。

足下に大きめの瓦クドや花立てが見えますので、今も近くの明楽株が祀っておられるのでしょう。この場所から５０～６０ m 下った畑の岸のトンネルに、金比羅燈籠や小祠が祀られています。トンネルは、よく見ると古墳の横穴式石室の入り口が露出したものです。してみると、この磐座は、この古墳に葬られた者と関係があったかも知れません。

最後は、真星の星神社の磐座です。社伝によれば天武天皇の御代（６７０年頃）、白日突如黒雲かかり雷光を発し山中鳴動すること３５日間、天より「稜威雄走神（いずのおばしりのかみ）」「甕速日神（みかはやひのかみ）」が降臨、里人は宮を建てて磐座を鎮め祀り、この里を真星と称し、宮を星神の宮と崇めたと言います。

この磐座は、その前面に社を建て祀られています。天から神が降ったそうですが、明治政府の求めに応じ、無名の磐座に神の名を冠し、由緒書上帳をもって奏上したというあたりでしょう…か。山上の磐座を御神体とする赤磐市の備前一宮石上布都魂神社は、明治になって素戔嗚命を祭神としたそうです。

さて、以上が大井界隈で周知の磐座と言われるものです。これらと最初にご覧頂いた大井神社境内の岩と比べてどうでしょう。

真星･星神社の磐座

磐座は、石であること、祭祀の対象になったこと意外はっきりせず、大きさの決まりはないのです。しかし、自然崇拝が始まった時のことを考えますと、対象が山であれ木であれ岩であれ、偉大なものに神が宿ると考えるのが自然ではないでしょうか？そうだとすれば、合祀に際し、無造作に宮山へ移されたこの岩が果たして磐座であったかどうか。因みにこの岩は、玉田遊園地の南、足守堺の大井字片山にあった注連神社の聖なる石「オシメ様」と呼ばれていたものらしいのです。

そこで注目したいのが、この注連神社という社名です。注連とは注連縄（しめなわ）の注連です。注連縄で仕切られた区域は清浄な地という感覚を持つように、注連とは本来境目を意味する言葉なのです。これが大井と足守の境目にあると言うことは、オシメ様はもとは境目の目印に置かれたものと言うのは、罰あたり者の戯言でしょうか。